

今昔物語集傑作選 (一)

(國語)

大 林

潤

Fine Stories from *Konjaku-monogatari-shu* (No. 1)

Jun ŌBAYASHI

This paper is an annotation from *Konjaku-monogatari-shu*, which I have chosen as teaching materials. I have chosen twenty fine stories from this work. In this paper, four of these twenty stories are annotated: A Stupa, Dōjōzi temple, Mother of Gen-shinsōzu, and Warashibe-chōja.

§ 1 凡例

- 一 本書は、「今昔物語集」の中から、後代にも広く流布された傑作短編二十編を選んで編さんしたものである。
- 二 本書は、日本古典全書本(底本、攷証今昔物語集本)を底本にして、できるだけ読みやすい本文にしたものである。

三 本書は、底本にならって、漢字平仮名交り文を使用した。底本の漢字はできるだけ常用漢字に改め、句読点も分りやすく打ちかえた。

四 本書の頭注はできるだけ簡略にした。参照した書物は、主に、日本古典文学大系「今昔物語集」(山田孝雄他、岩波書店)、日本古典文学全集「今昔物語集」(馬淵和夫他、小学館)、日本古典集成「今昔物語集」(阪倉篤義他、新潮社)、日本古典全書「今昔物語」(長野誉一、朝日新聞社)、東洋文庫「今昔物語集」(永積安明他、平凡社)、完訳日本の古典「今昔物語集」(馬淵和夫他、小学館)、角川文庫「今昔物語集」(佐藤謙三、角川書店)等である。

五 本書は、高専生、大学教養部生、大学受験生の古典講読用テキストとして編さんしたものが、一般の古典文学愛好家の方々にも楽しく味読していただけるよう配慮した。

## §2 目次

- (1) 卒堵婆そとば (巻10第36話) 姫ひめ、毎日ひごとに卒堵婆そとばに血の付くるを見るものがたり
- (2) 道成寺だうじやうじ (巻14第3話) 紀伊国きいこくの道成寺だうじやうじの僧そう、法華を写して蛇を救ふものがたり
- (3) 源信僧都げんしんそうづの母 (巻15第39話) 源信僧都げんしんそうづの母の尼に、往生おんじやうのものがたり
- (4) 薬しべ長者わら (巻16第28話) 長谷はせに参る男おとこ、観音くわんおんの助けによりて富を得るものがたり
- (5) 六の宮の姫君 (巻19第5話) 六の宮の姫君むのみやのひめぎみの夫おとこ、出家しゆげのものがたり

- (6) 往生絵巻  
 (巻19第14話 讃岐国多度の郡の五位、法を聞きて即ち出家するものがたり)
- (7) 初恋  
 (巻22第7話 高藤内大臣のものがたり)
- (8) 保昌と袴垂  
 (巻25第7話 藤原保昌朝臣、盗人袴垂にあふものがたり)
- (9) 馬盗人  
 (巻25第12話 源頼信朝臣の男、頼義、馬盗人を射殺すものがたり)
- (10) 猿神  
 (巻26第8話 飛驒国の猿神、生贄を止むるものがたり)
- (11) 芋粥  
 (巻26第17話 利仁將軍、若き時、京より敦賀へ五位をゐて行くものがたり)
- (12) 浅茅が宿  
 (巻27第24話 人の妻、死にて後、もとの形となりて、旧夫に会ふものがたり)
- (13) 稻荷詣で  
 (巻28第1話 近衛舍人どもの稻荷詣でに、重方、女にあふものがたり)
- (14) 鼻  
 (巻28第20話 池尾の禅珍内供の鼻のものがたり)
- (15) 受領根性  
 (巻28第38話 信濃守藤原陳忠、御坂に落ち入るものがたり)
- (16) 女盗賊  
 (巻29第3話 人に知られざる女盗人のものがたり)

(17) 羅城門らしやうもん

(卷29第18話 羅城門にて上層に登り、死人を見るものがたり)

(18) 好色

(卷30第1話 平定文、本院の侍従に仮借するものがたり)

(19) 葦刈り

(卷30第5話 身貧しき男の去りし妻、摂津守の妻となるものがたり)

(20) 姨母棄て

(卷30第9話 信濃国の姨母棄て山のものがたり)

§ 3 (1) 卒堵婆そとば

(卷10第36話 嬭おな、日毎に卒堵婆に血の付くるを見るものがたり)

1 中国

今は昔、震旦しんたんの□の代に、□州といふ所に大きな山あり。その山の頂に卒堵婆あり。その山の

(四)

2 諸本欠字

麓に里あり。その里に一人の嬭住む。年八十ばかりなり。その嬭、日に一度必ずその山の頂にある卒堵

3 諸本欠字

婆を上りて拝みけり。大きに高き山なれば、麓より峰へ昇るほど、峻しく、気悪しくして道遠し。しか

4 高い石塔

れども、雨降るとても障らず、風吹くとても止まず、雷電すとても恐れず。冬の寒く凍れるにも、夏の

5 気象も悪く

熱く堪へ難きにも、一日を欠かさず、必ず上りて、この卒堵婆ををがみけり。

6 深くは

かくの如くすること年来になりぬ。人、これを見て、強ちにその本縁を知らず。ただ卒堵婆ををがむ

7 わけ

なめりと思ふ程に、夏極めて熱き頃、若き男、童子等、この山の峰に上りて、卒堵婆のもとに居て冷む

8 卒堵婆をまわつてみる挙動

間、この嬭、腰は二重なるものの、杖にかかりて汗をのびひつ。卒堵婆のもとに上り来たりて、卒堵婆をめぐりて見れば、ただ、卒堵婆をめぐり奉るなめりと思ふに、卒堵婆をめぐることの怪しければ、この冷む者ども、一度にもあらず、度々これを見ていはく、「この嬭は、何の心ありて、苦しきに、かく

が不審だったので

の如くはするにかあらむ。今日来たらば、このこと問はむ」といひ合はせける程に、常のことなれば、

嬭、這ふ這ふ上りにたり。

- 9 「すら」に同じ  
10 「すら」に同じ  
11 「故」か？

12 死んだりするといけないか  
らと思つて

13 ばかにし、嘲笑して  
14 もちろんですとも

15 きつと崩れることだろうよ  
16 翌日  
17 びっくりし、ころがるよう  
にして  
18 生きながらえなさい  
19 村中に告げまわつて

この若き男ども、嫗に問ひていはく、「嫗は、何の心ありて、我らが若きそら、冷まむがために来たるそら、なほ苦しきに、冷まむがためなりと思へども、冷むこともなし。また、することもなきに、老いたる身に、日毎に上り下るるぞ。極めて怪しきことなり。この□<sup>11</sup>知らしめ給へ」と。嫗のいはく、「この比の若き人は、げに怪しと思すらむ。かくの如く来たりて、卒堵婆を見ることは、近來のことにあらず。我、ものの心知り初めてより後、この七十余年、日毎にかく上りて見るなり」と。男どものいはく、「しかれば、『その故を知らしめ給へ』といふなり」と。嫗のいはく、「おのれが父は百二十にてなむ死にし。祖父は百三十にてなむ死にし。また、それが父や祖父などは、二百に余りてなむ死にけり。それらがいひ置きけるとて、『この卒堵婆に血の付かむ時ぞ、この山は崩れて、深き海となるべき』と父の申し置きしかば、麓に住む身にて、山崩れば、打ち襲はれて死にもぞするとて、もし血付かば、逃げて去らむと思ひて、かく日毎に卒堵婆を見るなり」と。

男ども、これを聞きて、嗚呼つき、嘲りて、「恐しきことかな。崩れむ時は告げ給へ」といひて咲ひけるをも、嫗、我を咲ひいふとも心得で、「さらなり。いかでか、我ひとり生かむと思ひて、告げ申さざらむ」といひて、卒堵婆をめぐり見て、返り下りぬ。

その後、この男どものいはく、「この嫗は今日は来たらし。明日ぞまた来たりて、卒堵婆を見むに、怖して走らしめて、咲はむ」といひ合はせて、血を出して、この卒堵婆に塗り付けて、男どもは返りて、里の者どもに語りていはく、「この麓なる嫗の、日毎に上りて、峰の卒堵婆を見るが怪しければ、その故を問ふに、しかしかなむいひつれば、明日怖して走らしめむとて、卒堵婆に血をなむ塗りて下りぬ」と。里の者ども、これを聞きて、「さぞ崩れなむものか」などいひ咲ふこと限りなし。

嫗、またの日上りて見るに、卒堵婆に濃き血多く付きたり。嫗、これを見て、迷ひ倒れて、走り返りて、叫びていはく、「この里の人、速かにこの里を去りて、命を生くべし。この山、たちまちに崩れて、深き海となりなむとす」かくのごとく普く告げめぐらして、家に帰り来たりて、子、孫に物の具どもを荷ひ持たしめて、その里を去りぬ。これを見て、血を付けし男ども、咲ひののしり合ひたるほどに、そのこととなく世界さざめき、ののしり合ひたり。風の吹き出づるか、雷の鳴るかなと思ひて、怪しむほ

- 20 あたり一面ざわつき、大きな音が響いた
- 21 大空がまっ暗になって
- 22 震動し始めた
- 23 これはどうしたことだ
- 24 逃げだせた者
- 25 行方も分らず
- 26 取りおさめる
- 27 前もって
- 28 逃げる事ができず

§ 4 (2) 道成寺だうじやうじ

(巻14第3話

紀伊国の道成寺の僧、法華を写して蛇を救ふものがたり)

- 1 和歌山県にある熊野三山のこと、本宮、新宮、那智かなり、平安中期以降、熊野詣でが盛んになった
- 2 ひとり身の女
- 3 手厚くもてなした
- 4 揺り起こす
- 5 私を哀れと思ってください

どに、虚空<sup>21</sup>、つつ暗みになりて、奇異に恐ろしげなり。

しかるに、この山動き立ちたり。「これはいかに、いかに」といひののしり合ひたるほどに、山はただ崩れに崩れ行く。その時に、「嫗、実をいひけるものを」などいひて、たまたまに逃げ得たる輩ありといへども、祖の行きけむ方を知らず、子の逃げむ道を失へり。況んや、家の財、物の具知ることなくして、音を挙げて叫び合ひたり。この嫗ひとり、子、孫引き具して、家の物の具ども一つ失ふことなくして、兼ねて逃げ去りて、他の里に静かに居たりけり。このことを咲ひし者どもは、逃げあへずして、皆死にけり。

しかれば、年老いたらむ人のいはむことをば、信すべきなり。かくて、この山皆崩れて、海になりけり。奇異のこととなりとなむ語り伝へたとや。

今は昔、熊野に参る二人の僧ありけり。一人は年老いたり。一人は年若くして、形貌美麗なり。牟婁の郡に至りて、人の屋を借りて、二人ともに宿りぬ。

その家の主、寡にして若き女なり。女の従者、二、三人ばかりあり。この家主の女、宿りたる若き僧の美麗なるを見て、深く愛欲の心を発して、ねんごろにいたはり養ふ。しかるに、夜に入りて、僧どもすでに寝ぬる時に、夜半ばかりに、家主の女、ひそかにこの若き僧の寝たる所に這ひ至りて、衣をうち覆ひて並び寝て、僧を驚かす。僧、驚きさめて、恐れ迷ふ。女のいはく、「わが家には、さらに人をば宿さず。しかるに、今夜、君を宿すことは、昼、君を見はじめつる時より、夫にせむと思ふ心深し。されば、君を宿して、本意を遂げむと思ふによりて、近づき来たれるなり。我、夫なくして寡なり。君、あはれと思ふべきなり」と。僧、これを聞きて、大きに驚き恐れて、起き居て、女に答へていはく、

- 6 熊野権現の社前
- 7 おたがいに権現の罰を蒙らねばならないだろう
- 8 きつぱりと拒絶した
- 9 悩まし感わせ
- 10 なだめすかして
- 11 お灯明、お供え物を供えて
- 12 帰途
- 13 全く余念なく
- 14 これこれの
- 15 くやしがつて
- 16 一尋は約一・五メートル、ここでは七メートル余りの大蛇
- 17 帰途の道に沿うて走って行く
- 18 自然に告げ知らせる人があつて
- 19 和歌山県日高郡川辺町にある天台宗、日高寺

「我、宿願あるによりて、日ごろ、身心精進にして、遙かの道を出で立ちて、権現の宝前に参るに、たちまちにここにして願を破らむ、たがひに恐れあるべし。されば、すみやかに、君、この心を止むべし」といひて、あながちに辞ぶ。女、大きに恨みて、終夜、僧を抱きて擾乱し、戯るといへども、僧、さまさまの言をもつて、女を誘へて、いはいはく、「我、君のたまふこと、辞ぶるにはあらず。されば、今、熊野に参りて、両、三日に、御明、御幣を奉りて、還向のついでに、君のたまはむことに随はむ」と約束をなしつ。女、約束をたのみて、もとの所に返りぬ。夜明けぬれば、僧、その家を立ちて、熊野に参りぬ。

その後、女は約束の日を計へて、さらに他の心なくして僧を恋ひて、もろもろの備へをまうけて待つに、僧、還向のついでに、かの女を恐れて寄らで、忍びて他の道より逃げて過ぎぬ。女、僧の遅く来たるを待ちわづらひて、道の辺に出でて、往還の人に尋ね問ふに、熊野より出づる僧あり。女、その僧に問ひて言はく、「その色の衣着たる、若く、老いたる二人の僧は還向やしつる」と。僧のいはく、「その二人の僧は、早く還向して、両、三日になりぬ」と。女、このことを聞きて、手を打ちて、すでに他の道より逃げて、過ぎにけりと思ふに、大きに怒りて、家に返りて、寢屋に籠り居ぬ。音せずしてしばらくありて、すなはち死ぬ。

家の従の女ら、これを見て、泣き悲しむほどに、五尋ばかりの毒蛇、たちまちに寢屋より出でぬ。家を出でて道におもむく。熊野より還向の道のごとく走り行く。人、これを見て、大きに恐れをなしぬ。かの二人の僧、前立ちて行くといへども、おのづから人ありて告げていはく、「この後に奇異のことあり。五尋ばかりの大蛇出で来て、野山を過ぎ、疾く走り来たる」と。二人の僧、これを聞きて思はく、「定めて、この家主の女の、約束を違へぬるによりて、悪心を発して、毒蛇となりて、追ひて来たるならむ」と思ひて、疾く走り逃げて、道成寺といふ寺に逃げ入りぬ。

寺の僧ども、この僧どもを見ていはく、「何事によりて走り来たるぞ」と。僧、この由を具さに語りて、助くべき由をいふ。寺の僧ども、集まりて、この事を議して、鐘を取り下して、この若き僧を鐘の中に籠めすゑて、寺の門を閉ぢつ。老いたる僧は、寺の僧に具して隠れぬ。

- 20 釣鐘の頂部にある龍頭形の  
つり手  
21 一時は二時間、ここはおよ  
そ四、五時間か  
22 全く近づくことができない  
さえも  
23 安居修行を積んだ上席の僧  
24 まっすぐに来て  
25 とらわれて  
26 むくつけき、汚れた蛇身と  
なつて  
27 特別に、廣大無辺な慈悲心  
を起し、身心を浄めて  
28 法華經二十八品のうち第十  
六品、釈迦が不可思議な仏  
であることを説く  
29 仏道心  
30 私財を投じて  
31 多くの僧を招き、一日の法  
会を営んで  
32 あなたが清浄なる善行をし

しばらくありて、大蛇、この寺に追ひ来たりて、門を閉ぢたりといへども、超えて入りて、堂を廻ること、一、兩度して、この僧を籠めたる鐘の戸のもとに至りて、尾をもつて扉を叩くこと、百度ばかりなり。遂に扉を叩き破りて、蛇入りぬ。鐘を巻きて、尾をもつて龍頭を叩くこと、二時、三時ばかりなり。寺の僧ども、これを恐るといへども、怪しんで、四面の戸を開きて、集まりて、これを見るに、毒蛇、両の眼より血の涙を流して、頸を持ち上げて、舌嘗めずりをして、もとの方に走り去りぬ。寺の僧ども、これを見るに、大鐘、蛇の毒熱の氣に焼かれて、炎盛りなり。敢へて近づくべからず。されば、水をかけて、鐘を冷やして、鐘を取り去けて、僧を見れば、僧、みな焼け失せて、骸骨なほし残らず。わづかに灰ばかりあり。老僧、これを見て、泣き悲しんで返りぬ。

その後、その寺の上藤たる老僧の夢に、前の蛇よりも大きに増れる大蛇、直ちに來て、この老僧に向かひて、申していはく、「我はこれ、鐘の中に籠め置かれし僧なり。悪女、毒蛇となりて、遂にその毒蛇のために領せられて、我、その夫となれり。つたなく穢なき身を受けて、苦を受くること量りなし。今、この苦を抜かむと思ふに、わが力さらに及ばず。生きたりし時に、法華經を持ちきといへども、願はくは、聖人の廣大の恩徳を蒙りて、この苦を離れむと思ふ。ことに、無縁の大慈悲の心を発して、清浄にして、法華經の如来寿量品を書写して、我ら二つの蛇のために供養して、この苦を抜き給へ。法華の力にあらざれば、いかでか免るることを得む」といひて返り去りぬ、と見て、夢さめぬ。

その後、老僧、このことを思ふに、たちまちに道心を発して、自ら如来寿量品を書写して、衣鉢を投げて、もろもろの僧を請じて、一日の法会を修して、二つの蛇の苦を抜かむがために供養したてまつりつ。その後、老僧の夢に、一人の僧、一人の女あり。みな笑みを含みて、喜びたる氣色にて、道成寺に來たりて、老僧を禮拜していはく、「君の清浄の善根を修し給へるによりて、我ら二人、たちまちに蛇身を棄てて、善所に<sup>34</sup>おもむき、女は<sup>35</sup>切利天に生まれ、僧は<sup>36</sup>都率天に昇りぬ」と。かくのごとく告げはりて、おのおの別れて、空に昇りぬ、と見て、夢さめぬ。

その後、老僧、喜びかなしんで、法華の威力をいよいよ貴ぶこと限りなし。まことに、法華經の靈驗揭焉なること不可思議なり、新たに、蛇身を棄てて、天上に生まるること、偏に法華の力なり。これを見



- てくださったおかげで  
 浄土に行き  
 人間界の上にある欲界六天のうち、下から二番目の天  
 欲界六天のうち、下から四番目の天  
 喜び、感激して  
 効験の著しいことは不思議なくらいである  
 老僧の慈悲心もまれに見るりっぱなものだ  
 前世のよき仏縁による  
 前世からの因縁
- 35 聞人、みな法華経を仰ぎ信じて、書写し誦誦しけり。また、老僧の心ありがたし。それも、前生の善知識の至す所にこそあらめ。これを思ふに、かの悪女の、僧に愛欲を發せるも、みな前生の契りにこそはあらめ。  
 されば、女人の悪心の猛きこと、すでにかくのごとし。これによりて、女に近づく事を、仏、あながちに戒め給ふ。これを知りて、止むべきなりとなむ、語り伝へたるとや。
- 36 43  
 42 強く  
 43 仏の戒めをよくわきまえて、  
 42 女人に近づくことをやめる  
 べきだ
- 37 効験の著しいことは不思議なくらいである  
 38 老僧の慈悲心もまれに見るりっぱなものだ  
 39 前世のよき仏縁による  
 40 前世からの因縁
- 34 浄土に行き  
 35 人間界の上にある欲界六天のうち、下から二番目の天  
 36 欲界六天のうち、下から四番目の天  
 37 喜び、感激して  
 38 効験の著しいことは不思議なくらいである  
 39 老僧の慈悲心もまれに見るりっぱなものだ  
 40 前世のよき仏縁による  
 41 前世からの因縁
- § 5  
 (3) 源信僧都の母（巻15第39話 源信僧都の母の尼、往生のものがたり）  
 源信僧都の母の尼、往生のものがたり）
- 1 比叡山三塔の一、茲覚大師の創建  
 今昔、横川の源信僧都は、大和の国葛下の郡の人なり。  
 幼くして比叡の山に登りて、学問して、やむごとなき学生になりければ、三条の太后の宮の御八講に召されにけり。八講をはりて後、給はりたりける捧物の物どもを少し分けて、大和の国にある母のもとに、「かくなむ後の宮の御八講に参りて、給はりたる。初めたる物なれば、まづ見せたまつるなり」とて遣りたれば、母の返事にいはく、「遣せ給へる物どもは、喜びて給はりぬ。かくやむごとなき学生になり給へるは、限りなく喜び申す。ただし、かやうの御八講に参りなどして行き給ふは、法師になし
- 2 恵心僧都のこと、浄土教を主唱した  
 3 奈良県北葛城郡  
 4 天台宗総本山延暦寺

- 5 学問修行する学僧
- 6 朱雀天皇第一皇女、昌子内親王のこと
- 7 法華經八巻を講説する法華八講のこと
- 8 御供物
- 9 初めていただいた物
- 10 あなたは光栄だと思いでしようが
- 11 男子の成人の儀式、十二歳前後で行う
- 12 才徳をみがき
- 13 多武峰寺の増上人のこと
- 14 高貴な官方
- 15 まことに深く感激し、うれしく思っております
- 16 すぐれた善知識(仏道の導き手)
- 17 決して修行をおろそかにしてはなりません
- 18 それならば、ちよつと参りましょう
- 19 お会ひしたからといって、

聞こえし本意にはあらず。そこにはめでたく思はるらめども、<sup>10</sup> 嬭の心には違ひにたり。嬭の思ひしことは、女子はあまたあれども、男子はそこ一人なり。それを、元服をもせしめずして、<sup>11</sup> 比叡の山に上げれば、学問して、身の才よくありて、<sup>12</sup> 多武の峰の聖人のやうに貴くて、<sup>13</sup> 嬭の後世をも救ひ給へと思ひしなり。それに、かく名僧にて、はなやかに歩き給はむは、本意に違ふことなり。我、年老いぬ。生きたらむほどに、聖人にしておはせむを、心安く見置きて死なばやとこそ思ひしか。」と書きたり。

僧都、これを開きて見るにも、涙を流して、泣く泣く、すなはちまた、<sup>14</sup> 返り事を遣りていはく、「源信は、さらに名僧せむの心なし。ただ、尼君の生き給へる時、かくのごとく、やむごとなき宮ばらの御八講などに参りて、聞かせたてまつらむと思ふ心深くして、<sup>15</sup> 急ぎ申しつるに、かく仰せられたれば、きはめてあはれにかなしくて、うれしく思ひたてまつる。されば、仰せに随ひて、山籠りを始めて、聖人にならむ。『今は会はむ』と仰せられむ時にぞ参るべき。さらざらむ限りは、山を出づべからず。ただし、母と申せども、<sup>16</sup> きはめたる善人にこそおはしましけれ」と書きて遣りつ。

その返り事にはく、「<sup>17</sup> 今なむ胸落ち居て、冥途も安くおほゆる。返す返すうれしく思ひ聞こゆ。ゆめゆめおろそかにおはすべからず」と。僧都、これを見て、この二度の返り事を法文の中に巻き置きて、時々取り出して、見つつぞ泣きける。

かく山に籠りて、六年は過ぎぬ。

七年といふ年の春、母のもとにいひやりていはく、「六年はすでに山籠りにて過ぎぬるを、久しく見たてまつらねば、恋しくや思しめす。さば、<sup>18</sup> あからさまに詣でむ」と。

返り事にはく、「<sup>19</sup> げに恋しくは思ひ聞こゆれども、見聞こえむにやは罪は滅びむずる。なほ山籠りにておはせむを聞かむのみぞうれしかるべき。これより申さざらむ限りは、出で給ふべからず」と。僧都、これを見て、この尼君は、ただ人にもなき人なりけり。世の人の母は、かくいひてむや、と思ひて過すほどに、九年になりぬ。

告げざらむ限りは来たるべからずといひ遣せたりしかども、怪しく心細く思ひて、母の俄かに恋しくおほえければ、もし、尼君の失せ給ふべき時の近くなりたるか。また、わが死ぬべきにやあらむと、

- 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20
- 罪障が消えるものではない  
 ません  
 「さはあれ」の略、まあ、  
 いい  
 主語は男、「文を持ってい  
 る男に会った」と同意  
 それは私のことだ  
 尼君の筆跡ではなくて、つ  
 たない代筆で  
 この数日、何ということも  
 なく風の病でもおこつたの  
 かと  
 最後の時になったので、も  
 う一度お会いすることもな  
 く終わるのかと思うと  
 「給ふ」（四段）は、尼の  
 源信に対する尊敬語、「恋  
 しく思いますので」と同意  
 妙に母を恋しく思ったのは、  
 こういうことがあったから  
 なのだ  
 親子の縁は深いもの  
 仏道に強く勧めて下さつた
- あはれにおぼえて、<sup>20</sup>さはれ、来たるべからずとは宣ひしかども、詣でむと思ひて、出で立ちて行くに、  
 大和の国に入りて、道に、男、文を持ちて会へり。僧都、「いづくへ行く人ぞ」と問へば、男のいはく、  
 「しかじかの尼君の、横川<sup>よかは</sup>におはする子の御房のもとへ遺す文なり」といへば、「<sup>22</sup>しかいふは、我なり」と  
 といひて、文を取りて、馬に乗りながら、行く行く開きて見れば、尼君<sup>23</sup>の手にはあらで、賤<sup>よ</sup>しの様に書  
 かれたり。胸塞<sup>また</sup>がりて、いかなることのあるにかとおぼえて読めば、「日ごろ、何ともなく風の発りた  
 るかと思ひつるに、年の高き<sup>け</sup>氣にやあらむ、この二、三日弱くて、力なくおぼゆるなり。」「申さざらむ  
 限りは、出で給ふべからず」とは心強く聞こえしかども、限りの時になりぬれば、いま一度見たてまつ  
 らでや止みなむずらむと思ふに、限りなく恋しくおぼえ給へば、申すなり。疾<sup>と</sup>く疾<sup>と</sup>くおはせ」と書きたる  
 を見るに、怪しく心にかくおぼえつるは、かくありければこそありけれ。親子の契りはあはれなるこ  
 ととはいひながら、<sup>29</sup>仏の道にあながちに勧め入れ給ふ母なれば、かくはおぼえけるなりけりと思ひつづ  
 くるに、涙、雨のごとく落ちて、弟子なる<sup>がくしやう</sup>学生ども、二、三人ばかり具したりければ、それらにも、「か  
 かることのありければなりけり」といひて、馬を早めて行きければ、日暮れにぞ行き着きたりける。  
 急ぎ寄りて見れば、<sup>30</sup>むげに弱くなりて、たのもしげもなし。僧都、「かくなむ詣で来たる」と高やか  
 にいへば、尼君、「いかで疾<sup>と</sup>くはおはしつるぞ。けきの暁にこそ人は出だし立てつれ」と。僧都のいは  
 く、「<sup>31</sup>かくおはしければにや、近ごろ恋しくおぼえ給ひつれば、参りつるほどに、道にして使は会ひた  
 りつる」と。尼君、これを聞きて、「あなうれし。死の時には会ひ給ふまじきにかとこそ思ひつるに、  
 かくおはし会ひたること、契り深くあはれにもありけるかな」と氣の下にいへば、僧都のいはく、「念  
 仏は申し給ふか」と。尼君、「心には申さむと思へども、力なきに合はせて、<sup>35</sup>勧むる人のなきなり」と  
 いへば、僧都 貴きことどもをいひ聞かせつつ念仏を勧むれば、尼君、ねんごろに道心を発して、念仏  
 を一、二百返ばかり唱ふるほどに、<sup>あつまた</sup>暁方になりて、消え入るやうにて失せぬれば、僧都のいはく、「我、  
 来らざらましかば、尼君の臨終はかくはなからまし。我、親子の機縁深くして来たり合ひて、念仏を勧  
 めて、道心を発して、念仏を唱へて失せ給ひぬれば、往生は疑ひなし。いはんや、我を、<sup>おと</sup>聖の道に勧め給  
 へる志によりて、かく終はりは貴くて失せ給ふなり。されば、親は子のため、子は親のために、限りな

30 母だから、このように感じられたのだろう  
 ひどく衰弱して、危うい状態である。

37 かりける善知識かな』といひてぞ、僧都、涙を流して泣きける。その後、七七日の法事をたしかに修しをはりて、弟子引き具して、横川には返りたりける。  
 横川の聖人たちも、これを聞きて、あはれなりける親子の契りなりといひてぞ、泣く泣く貴びけるとなむ、語り伝へたるとや。

31 このように衰弱しておられたからでしょうか

32 「給ふ」(四段)は、源信の尼に対する尊敬語、「恋しく思いましたので」

33 主語は使、「使者に会いました」と同意

34 親子の縁が深く、ありがたいことですね

35 仏道を勧める導師のこと

36 ありがたい御仏の教え

37 仏道に導く善友

§ 6 (4) 薫しへ長者 (巻16第28話)

長谷に参る男、観音の助けによりて富を得るものがたり)

1 若く身分の低い侍

2 長谷寺

3 わずかな物

4 こうしてこのままで

5 飢死

6 もしわずかなお恵みでも与

今は昔、京に父母妻子もなく、知りたる人もなかりける青侍ありけり。

長谷に参りて、観音の御前に向かひて、申していはく、「我、身貧しくして、一塵の便りなし。もし、この世にかくて止むべくば、この御前にして千死に死なむ。もし、自ら少しの便りをも与へ給ふべくば、その由を夢に示し給へ。さらざらむ限りは、更に罷り出でじ」といひて、うつぶし臥したり。

寺の僧ども、これを見て、「これはいかなる者の、かくては候ふぞ。見れば、物食ふ所ありとも見え。もし、絶え入りなば、寺に穢れ出で来なむとす。誰を師とはするぞ」と問へば、男のいはく、「我、

- えて下さるのならば  
 7 そうでない限りは  
 8 死人の穢れ  
 9 師の僧  
 10 死人の穢れという一大事  
 11 力を合わせて  
 12 二十一日  
 13 とばり、垂れ布  
 14 いたわってくれた僧の部屋  
 15 何気なく  
 16 これが賜わり物なのか  
 17 しかるべき身分の女  
 18 引きかづくようにした  
 19 それをもらってくれ  
 20 若君がほしがっておられる  
 から、さしあげよ  
 21 殊勝にもよくさしあげたと  
 いうことで  
 22 檀紙  
 28 身分よき人が、お忍びで

貧しき身なり。誰を師とせむ。ただ観音をたのみ奉りてあるなり。更に物食ふ所なし」と。寺の僧ども、これを聞きて、集まりていはく、「この人、ひとへに観音を恐喝し奉りて、更に寄る所なし。寺のために大事出で来なむとす。されば、集まりて、この人を養はむ」と定めて、かはるがはる物を食はずれば、それを食ひて、仏の御前を去らずして、昼夜に念じ入りて居たるに、三七日にもなりぬ。<sup>12</sup>  
 その曙けぬる夜の夢に、御帳のうちより、僧、出でて、この男に告げて宣はく、「汝が前世の罪報をば知らずして、あながちに責め申すこと、きはめて当らず。しかれども、汝を哀れぶが故に、少しのこゝとを授けむ。されば、寺を出でむに、何物なりといふとも、ただ手に当らむ物を棄てずして、汝が賜はる物と知るべし」と宣ふ、と見て、夢さめぬ。<sup>14</sup>  
 その後、哀れびける僧の房に寄りて、物を乞ひて、食ひて出づるに、大門にしてけつまづきて、うつぶしに倒れぬ。起き上る手に、不意ににぎられたる物あり。見れば、藁の筋なり。これを賜ふ物にてあるにやと思へども、夢をたのみて、これを棄てずして返るほどに、夜も曙けぬ。<sup>15</sup>  
 しかる間、あぶ、顔の回りに飛ぶを、煩はしければ、木の枝を折りて掃ひ去れども、なほ同じやうに來れば、あぶを手に捕へて、腰をこの藁筋をもつて引きくりて持たるに、あぶ、腰をくくられて飛び迷ふ。<sup>16</sup>  
 しかる間、京より、さるべき女、車に乗りて參る。車の簾をうちまとひて居たる兒あり。その形美麗なり。兒のいはく、「かの男、その持たる物は何ぞ。それ乞ひて得させよ」と。馬に乗りてある侍、來たりていはく、「かの男、その持たる物、若君の召すに、奉れ」と。男のいはく、「これは観音の賜ひたる物なれども、かく召せば、奉らむ」といひて渡したれば、いとあはれに奉りたりとて、「喉乾くらむ。これ食へよ」とて、大柑子三つを、かうばしき陸奥国紙につつみて、車より取らせたれば、賜はりて、藁筋一つが大柑子三つになりぬることと思ひて、木の枝に結び付けて、肩にうちかけて行くほどに、品賤しからぬ人、忍びて、侍など具して、歩より長谷へ參るあり。<sup>21</sup>  
 その人、歩び極じて、ただ疲れに疲れ居たるを、見れば、「喉乾く。水飲ませよ。すでに絶え入らむとす」といへども、供の人々、手を迷はして、近く水やあると騒ぎ求むれども、水なし。「これはいか

- 24 歩き疲れて
- 25 もう死んでしまいうさだ
- 26 あわてふためいて
- 27 疲れはてて、気が遠くなつていたが
- 28 目をさまさせて
- 29 いつものまにか氣を失つていたのだなあ
- 30 その男が喜ぶようなことは食物、日用品を入れた竹行李、皮行李を積んだ馬幕
- 32 主人にさしあげようとする
- 33 自分の志の一端を表わしたものだ
- 34 午前八時頃
- 35 主語は、よき馬に乗りたる者、「道を進みもやらず、ゆっくり歩ませてくるのに出会った」と同意
- 37 みるみるうちに死んでしまつた
- 36 35 午前八時頃
- 34 33 32 31 30 29 28 27
- 「長谷に参らせ給ふ人の歩が極せさせ給ひて、御喉乾かせ給ひたれば、水を求むるなり」と。男のいはく、「おのれ、柑子三つを持ちたり。これ奉らむ」と。
- その時に、主人は極じて寝入りたるに、人、寄りて驚かして、「これなる男の、柑子を持ちたるを奉れるなり」といひて、柑子三つを奉れば、主人のいはく、「我は喉乾きて、すでに絶え入りたりけるにこそありけれ」といひて、柑子を食ひて、「この柑子なからましかば、旅の空にて絶え入り果てまし。きはめてうれしきことなり。その男はいづこにあるぞ」と問へば、「ここに候ふ」と答ふ。主人のいはく、「かの男のうれしと思ふばかりのことは、いかがすべき。食物などは持て来たるか。食はせてつかはせ」といへば、その由を男にいふに、旅籠馬、皮子馬など来て来ぬ。すなわち、屏幔引き、疊敷きなどして、昼の食物ここに奉らむ。この男にも食はせられたれば、食ひつ。主人、この男に清き布を三段取り出して、賜ひていはく、「この柑子のうれしきは、いひ尽くすべくもなけれども、かかる旅にては、いかにかはせむとする。ただ、これは志の初めばかりを見するなり。京にはそこそこになむある。必ず参れ」とて、その所を去りぬ。
- 男、布三段を取りて、脇に挟んで、「藁筋一つが布三段になりぬること、これ観音の御助けなりけり」と、心のうちに喜びて行くほどに、その日暮れぬれば、道の辺なる人の小家に宿りぬ。
- 夜醒けぬれば、疾く起きて行くほどに、辰時ばかりに、よき馬に乗りたる者の、馬を愛しつ、道も行きやらず、ふるまはせて、あひたり。「実にめでたき馬かな」と見るほどに、この馬、俄かに倒れて、ただ死にに死ぬるを、主、我にもあらぬ気色にて下りて立てり。すなはち鞍下しつ。「これはいかがせむとする」といへども、かひなくて死に果てぬれば、手を打ちて、泣くばかり思ひて、賤しの馬のあるに鞍置き替へて、乗り去りぬ。従者一人を留めて、「これ引き隠せ」といひ置きたれば、男、死にたる馬を守り立てるに、この男、歩が寄りていはく、「これは、いかがなりつる馬の俄かに死ぬるぞ」と。
- 答へていはく、「これは、陸奥国よりこれを財にて奉り給へるに、万の人、ほしがりて、値も限らず買

- 38 茫然とした様子で  
手を打って、泣かんばかり  
に残念がって
- 39 別の駄馬  
この馬を財物として献上さ  
れたのだが
- 40 買い値をつけず、いくらで  
も買おう
- 41 その代価、絹一疋さえ受け  
とらないうちに失ってしま  
った
- 42 生き物というものは不思議  
なものです
- 43 不明、「この布一むら取ら  
せれば」（古本説話・宇  
治拾遺）
- 44 思いがけず得をした  
不思議なお告げ
- 45 この馬を生き返らせて下さ  
い
- 46 もしかして、人が来はしま  
いか
- 47 刻限のかわるまで

はむといひつれども、惜しんで持ち給へりつるほどに、その値一疋をだに取らずして止みぬ。皮をだに  
剝がばやと思へども、旅にてはいかにかはせむと思ひて、守り立てるなり」と。

この男のいはく、「実にいみじき馬かなと見つるほどに、かく死ぬれば、命あるものは奇異なり。皮  
剝ぎても、たちまちに干し得難かりなむ。おのれはこの辺に住めば、皮を剝ぎて使ふべきことのあるな  
り。おのれに得させて、返り給ひぬ」といひて、この布<sup>45</sup>  めを<sup>46</sup>  はせれば、男、思はぬに所  
得したりと思ひて、思ひ返すこともやあると思へば、布を取りて、逃ぐるがごとくして走り去りぬ。

この死にたる馬買ひたる男の思はく、「我、観音の示現によりて、菓筋一つを取りて、柑子三つにな  
りぬ。柑子また布三段になりぬ。この馬は仮に死にて、生き返りてわが馬となりて、布三段がこの馬に  
ならむずるにや」と思ひて、買ふなるべし。さらば、男、手を洗ひ、口を漱ぎて、長谷の御方に向かひ  
て、礼拝して、「もし、これ、御助けによるならば、速かにこの馬生けさせ給はらむ」と念ずるほどに、  
馬、目を見開きて、頭を持ち上げて、起きむとすれば、男、寄りて、手を係けて起し立てつ。うれしき  
こと限りなし。もし、人もぞ来ると思ひて、やうやく隠れたる方に引き入れて、時替るまで息ませて、  
もとのやうになりぬれば、人の家に引き入れて、布一段をもって賤しの鞍に替へて、これに乗りて京の  
方に上るに、宇治のほどにて日暮れぬれば、人の家に留まりて、いま一段をもって、馬草、わが糧にな  
して、曙けぬれば、京へ上るに、九条わたりなる人の家を見るに、ものへ行かむずる様に、出で立ち騒  
ぐ。

男の思はく、「この馬を京にゐて行くらむと、もし、見知りたる人もありて、盗みたるといはれむも  
よしなし。されば、ここにて売らむ。出で立ちする所には、馬、要するものぞかし」と思ひて、馬より  
下りて、寄りて、「馬を買ふ」と問ひければ、馬を求むる間にて、この馬を見るに、実によき馬にてあ  
れば、喜びていはく、「ただ今、絹布などはなきを、この南の田居にある田と米少しとは替へてむ  
や」と。男のいはく、「絹布こそは要には侍れども、馬の要あらば、ただ仰せに随はむ」と。されば、  
この馬に乗り試むるに、実に思ふ様なりければ、九条の田居の田一町、米少しに替へつ。

男、券などしたため取りて、京にほの知りたりける人の家に行き宿りて、その米を糧として、二月は

51 旅に出る様子で、その準備で大騒ぎしている  
 52 「ゐて行くらむに」か  
 53 ちようど馬を求めていた時  
 54 田  
 55 絹布がほしいのですが、馬が人用というのなら  
 56 地券など受けとって  
 57 半分を年貢米として取って

58 生活の資  
 59 豊かにくらした  
 60 あらたかである

か  
 かりのことなれば、その田をそのわたりの人に預けて、作らしめて、<sup>57</sup>半ばは取りて、それを便りとして世を過すに、便り、ただ付きに付きて、家などまうけて、<sup>59</sup>楽しくぞありける。その後は長谷の観音の御助けなりと知りて、常に参りけり。  
<sup>60</sup>観音の靈験は、かくありがたきことをぞ示し給ひけるとなむ、語り伝へたとや。

(平成二年一〇月一五日受付)